# 〝緑の復元〟へ 最後の植樹

## ◇高校生卒業記念森づくり◇

## 四半世紀で3万3650本

それぞれの思いを込めて苗木を植樹する参加者ら

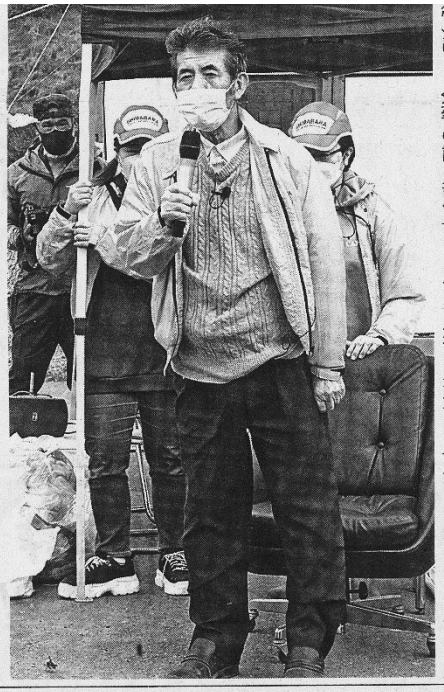
雲仙・普賢岳噴火災害で荒廃した郷土に緑をよみがえらせる活動に取り組んでいる「雲仙百年の森づくりの会」（宮本秀利会長）は13日、島原市千本木地区の砂防えん堤内で「島原半島高校生卒業記念植樹」（卒業の森）を開催。今回で最後となる植樹活動には、今春に島原半島内の公立・私立高校を巣立った卒業生や学校関係者、市民有志など約70人が参加し、四半世紀にわたる植樹活動への思いや故郷への感謝の思いを込めながら苗木を植えた。

雲仙地域に自生する樹木の種子から育てた苗木を使い、1999（平成11）年から毎年実施されている恒例行事。前身となる98年の活動とあわせて25年目。長年にわたる地元高校生たちとの植樹活動は高く評価され、2016年度の全国育樹活動コンクールでは、団体部門で「林野庁長官賞」に輝いている。

主催者によると、今回の植樹を含め、これまでに約4ヘクタールの被災地に3万3650本の苗木を植樹しており、大きいもので樹高約10㍍、幹回り約40㌢まで成長しているという。

例年は2月に同半島内の高校を卒業する数百人が一堂に会して行われる大規模イベントだが、ことしも昨年に引き続き新型コロナウイルスの影響で卒業前の開催を見送り、市民有志なども交えた自由参加とした。

開会にあたり宮本会長（72）は、〝災害の語り部〟として植え続けた活動を振り返り、「国土交通省をはじめ、県や市など多くの方々のおかげでここまでの活動ができたことを大変嬉しく思う。豊富な湧水など皆さんが生活の中で受けている恩恵は山や森のおかげでできていることを知ってもらうとともに、自分たちのふるさとは自分たちで復興するんだという思い、そして故郷への愛情を育んでほしいという思いがあった。どんなことがあっても、自分の手で植樹したふるさとへの思いを忘れず、樹木とともに自分自身を成長させてもらいたい」などとエールをおくった。



あいさつを述べる宮本秀利・雲仙百年の森づくりの会会長

今回用意された苗木は「クヌギ」や「ヤマボウシ」など350本。参加者は卒業前に各校に贈られた「サクラ」（ソメイヨシノ、樹高約3㍍）の成木を植樹後、緑や茶色の葉をつけた苗木を1本1本丁寧に植えていった。

就職などで故郷を離れる友人たちと最後の思い出づくりのために参加したという井上愛加里さん（18）＝島原農高生活福祉科卒＝は「（今目にしている）故郷の自然やその美しさがあるのは、歴代の先輩方をはじめとする多くの方々が続けてこられた植樹活動のおかげ。4月からは市内のホテルに就職し、地元に残る。最後の植樹ということに残念な気持ちもあるが、苗木たちのように故郷に貢献を。そして災害の記憶や教訓を伝える森づくりの活動に今後もできうる限り協力していきたい」などと話した。

雲仙百年の森づくりの会では今後、官民一体となった育樹活動を予定しているという。